

## 追悼

## 和賀井睦夫前会長を偲ぶ



和賀井睦夫会長におかれましては、令和4年11月27日に逝去されました。ここに謹んで哀悼のまことを捧げ、ご冥福をお祈りいたします。

和賀井会長は、昭和25年に旧制農学科をご卒業され、栃木県の農業行政、農業振興公社、県人事委員会などで要職を務められました。平成12年から峰ヶ丘同窓会の活動に参画され、平成18年から平成29年までの6期12年間を峰ヶ丘同窓会会長として諸課題の解決に取り組み私たちを先導されました。

当時、大学当局からフランス式庭園、旧講堂などの一体的な保存・利用計画が示されました。この計画は、旧講堂をはじめ全学に散在している部室・サークル用の部屋を課外活動施設として運動場北側に新設し、その後、旧講堂の改修工事を進めるといものでした。これらの工事には多額の予算を要し、多くは寄付に依存するものでした。峰ヶ丘同窓会は計画の趣旨に賛同し、皆様のご協力によって応分の寄付を達成することができたのです。

「宇都宮大学庭園」は「登録記念物」として平成29年に、また「峰ヶ丘講堂」は平成20、21年の改修をへて、同じく「登録有形文化財」として文化庁の指導をうけ今日に至っており、貴重な景観スポットにもなっています。この旧講堂保存計画は、和賀井睦夫会長が先導された、峰ヶ丘同窓会の歴史的な事業であると思います。

峰ヶ丘講堂の周りには今では珍しくなってしまった樹木が多く植えられています。庭園、講堂、ロックガーデンなどを含む景観は、今や宇都宮大学のかげがえのない遺産であり、永く後世に受け継がれることでしょう。

(昭41農卒 松澤 康男)

## 追悼

## 久保辰雄先生を偲ぶ



久保辰雄先生は令和5年3月20日永眠されました。4月生まれでしたので90歳を目前にした89歳でした。

昭和46年10月に、農林省畜産試験場（現 農研機構畜産研究部門）から家畜飼育学研究室に助教として着任されました。前任者である西山太平先生は畜産経営に関する調査研究をされていたので、久保先生の専門分野である家畜の栄養に関する化学的手法に必要な設備は冷蔵庫とGEの冷凍庫ぐらいしかありませんでした。久保先生は着任早々、実験用作業台、実験器具の乾燥棚（写真、2015年撮影）、鶏の飼育箱などを手作りされました。私を含め卒論学生3人も大工仕事を手伝いました。また、先生は蒸留装置や試験管などをガラス細工で作製され、徐々に実験設備を整えていかれました。



先生は着任された当初から牛の胃の中にいるプロトゾアの研究を始められ、これを胃の内容物から分離し試験管で単独培養することを目指していました。当時はプロトゾアの研究手法としてポピュラーなものでしたが、かなり手間暇がかかる方法でした。先生は休日でも餌やり、培養液の交換、観察、顕微鏡下での計数などを続けていらっしゃいましたが、恒温水槽の温度変化や培養液に流す二酸化炭素の漏れなどでうまく行きませんでした。先生には心残りだったと思います。

先生はお酒をそれほど召し上がりませんでした。指導学生を自宅に招いて奥様の手料理でもてなしていただきました。また、研究室旅行で夏休みに日光や猪苗代湖、銚子やいわきの海に出かけたり、スケートやスキーにも行ったりして、学生たちと楽しんでいらっしゃいました。

20数年間に卒論指導、修士および博士論文指導された学生数は200人近くになり、多方面で活躍しています。私は卒論研究の指導を受けた最初の学生の一人であり、助手として先生と一緒に研究と教育に励みました。

感謝を申し上げますとともにご冥福をお祈りいたします。

(昭48畜卒 菅原 邦生)



追悼

寺中理明先生を偲ぶ



本学名誉教授・農学博士の寺中理明先生は、令和5年7月22日に95歳の天寿を全うされました。

寺中先生は昭和3年のお生まれで、東京大学農学部をご卒業後、昭和26年に農林省東海近畿農業試験場、31年に東京大学農学部

植物病理学研究室助手、42年に農林省九州農業試験場畑病害研究室長を経て、44年10月に本学農学部植物病学研究室の助教授に就任されました。53年6月に教授に昇任され、学科長、評議員、農学部長など多くの役職を務められ、特に学部長として修士課程の再編にご苦労されました。平成5年に定年退職し、名誉教授とられました。本学ではエンドウ根腐病やダイコン根部の亀裂褐変症、トマトばら色かび病、ネギ黒腐菌核病などの菌学的研究に従事し、「*Aphanomyces* 属菌の見分け方と分離法（植物防疫講座）」や「植物病理学 基礎微生物学6」など多くの著書・論文を発表されました。

また日本植物病理学会では、評議員、関東部会長、学会誌編集委員長などを歴任して学会の発展のために大きく貢献され、平成10年に名誉会員に推挙されました。

さて、寺中先生といえば、正直で穏やかなお人柄で仰々しいことは好まず、ご自身を飾らず、真摯に研究に向き合い、常に学生に寄り添って大切にしようとする姿勢には多くの方々が信頼を寄せ、学生から慕われていました。先生は記憶力抜群で、25年間の卒業生全員の氏名や卒業年をすべて覚えていて、いくつになられてもスラスラと出てきました。また先生の書かれる字は極めて読みやすく、顕微鏡の観察図は見やすく正確で、学生実験で配布される資料には直筆の菌類の胞子の絵がいくつも使われていました。

最大の趣味は将棋で、アマチュア三段の腕前は学内に敵なしでした。その棋風は、相手に攻めさせて堂々と受け切ってしまう、というまさに王道をゆくものでした。

最後に、寺中先生は故郷の天草の海に海洋散骨され、穏やかに広い自然の中に還られました。心よりご冥福をお祈りいたします。

(生物資源科学科 名誉教授 夏秋 知英)

追悼

渡邊和之先生を偲ぶ



本学名誉教授渡邊和之先生は、2023年8月22日にご逝去されました。享年91歳でした。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

先生は、1931年9月8日に愛知県でお生まれになり、三重大学農学部をご卒業後、1954年に農林省に入省、農林省農事試験場、東北農業試験場で畑作栽培部門を担当され、1981年に宇都宮大学に赴任されました。先生のご研究分野は作物栽培学で、「作物生産における土壌管理の栽培学的意義に関する研究」で日本作物学会賞を受賞されております。

宇都宮大学農学部では1985年に栽培学研究室教授になられ、「栽培学」ならびに「作物学」の講義を担当されるとともに、「農作物の物質生産と収量成立過程の解析」および「環境ストレス下における畑作物の生育反応についての研究」を実施され、1997年まで16年間にわたり多くの学生の教育・研究に尽力されました。この間、日本作物学会では評議員、関東支部長として学問の発展に貢献され、1992年から1994年までは農学部長として農学部の発展に尽くされました。

栽培学研究室では、ラッカセイをはじめ畑作物についてのご研究で多くの学生を育てられました。先生は、やさしいお人柄で、決しておこることはなく、いつもニコニコしておられました。また、先生は大変なお勉強家で、博学でいらっしゃり、研究以外にもいろいろなことを学生たちに話してくださいました。畑では学生たちに直接の研究対象の作物だけではなく、他の多くの作物の栽培を体験させ、また野外での自然観察など幅広い教育をしていただきました。先生のご指導を受けた卒業生は、農業経営、国および都道府県の農業分野の研究・行政職、教員などとして社会で活躍しています。

先生は、ご退官後も大学で開かれる勉強会に参加されてご勉強を続けられ、来学された折には研究室にも立ち寄り、お亡くなりになる数年前まで後輩たちにいろいろと教えてくださいました。ほんとうにありがとうございました。

(生物資源科学科 名誉教授 和田 義春)



## 追悼

## 野村浩二先生を偲ぶ



令和5年4月16日に享年84歳で亡くなられた野村先生は、私の入学と同時に(1975年)に、旧農林省農業技術研究所から30代半ばの若さで本学に赴任されました。当時は農経棟前の芝生で学生と相撲を取るなど、「やんちゃ」

な先生でした。幸か不幸か、私は先生に見込まれたらしく、希望もしてない野村ゼミに配属され、そこでみっちり学問的薫陶を受ける羽目?になりました。ゼミの初っ端に「君は何故、需要曲線は右下がりだと安易に認めるんだ!」とえらい剣幕で叱咤されたことを今でも鮮明に覚えています。ゼミは午後1時から始まって、夜7時過ぎに終わるのが通例でした。卒論も何度も突き返えされ、先生の納得を得られないまま、締切日にこっそり提出した苦い思い出もあります。卒業後、奇しくも先生と同じ農水省の研究機関に入ると、職場の先輩達から「野村君の弟子か!そりゃ、大変だったろう!」とか「彼は一切妥協を許さない頑固で優秀な研究者だ!」などの評に接し、妙に納得しました。例えば、野村先生は我々ゼミ生を同じ研究仲間として対等に扱い、厳しい議論を挑発していたのではないか!?そのお陰で、私は「常識は先ず疑え!」とか「現場にこそ最先端の事象が潜んでいる」等の社会科学の基本的な心構えを、学部学生時代に叩き込まれたと感謝しています。ゼミ以外の野村先生は酒好きの兄貴的存在で、馴染みの小料理屋や大学近くの飲み屋に幾度か連れて行って頂きました。肴は決まってマーシャル経済学や会計学の現場適用の話で、当時の私にはチンプンカンプンでしたが、「研究って面白そう」と私に感じさせるほど、先生は嬉々として話してくれました。私が研究の途を歩んだのも、こうした酒の席での会話が遠因となっていると思っています。

先生は定年退職を待たずに、25年間の教鞭人生に自らピリオドを打たれました。私はその序盤の最も頑固で厳しく、でも澆刺とした研究者・野村浩二に出会えたことを誇りに思うとともに感謝しています。衷心より御冥福をお祈り申し上げます。

(昭54経卒 安藤 益夫)

## 追悼

## 五味仙衛武先生を偲ぶ



五味仙衛武先生が令和5年10月20日にご逝去されました(享年95歳)。先生は昭和3年8月、長野県富士見町に生まれました。父親は八ヶ岳酪農の責任者、町長や県議を歴任するなど地域リーダー的存在でした。旧制諏訪中学

を卒業したのち、昭和20年4月、宇都宮農林専門学校農業経済学科に入学、長男であったため、卒業後は郷里に戻り農家を継承するつもりでいたとのこと。しかし岩片磯雄・桐田啓一先生などから専門学校に残るよう説得され、以来、平成6年3月定年退官されるまで46年間、在職され、この間、評議員や農場長なども歴任されました。この在職期間は破られることがないであろうと自慢されていましたが、まさに宇都宮大学の生き字引でした。

先生の言葉を借りれば「生まれ育った環境から、農家の生きざまやそのあり方をもとめる」という現場重視の実践的研究姿勢を保ち続け、農業技術を体系的に論じた農法論は大いに評価されました。瑞穂野や桑島等、大学の近くの農家によく通う姿には感心させられたものです。他方、那須開拓の土地改良・水利などにも関心を払い「栃木県史」の作成にも尽力されました。

また、農業高校用の教科書『農業経営』の執筆にも長年携わり、高校生の教育にもかかわりました。内容が素晴らしく先生が担当してから採用率が高まり数社あった教科書会社はその出版を断念してしまったほどです。

退官後は、栃木県農業会議の会長を務めるなど県の農業振興に尽力されましたが、インターネット対局で趣味の囲碁を楽しんでいたようです。学内でも1、2の棋力で長年囲碁部の顧問をされていましたが、私も指導してもらいました。現在、碁会所に通って老後を楽しんでいられるのは先生のおかげだと、感謝している次第です。先生はスポーツも万能で、たとえば教職員のソフトボール大会で還暦を過ぎてなおセンターオーバーを放った打撃を思い出します。天国でも楽しんでいることでしょう。ご冥福をお祈りいたします。

(昭45経卒 津谷 好人)



追悼

前田安彦先生を偲ぶ



前田安彦先生が2023年12月9日、92歳で逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。先生は、1951年3月に宇都宮農林専門学校農芸化学科をご卒業後、東京大学農学部助手を経て、1962年2月に総合農学科農村生

活科学講座の講師として赴任されました。その後、1996年3月の定年退職まで、改組による学科などの変化はありましたが、食品化学研究室での教育・研究を担って来られました。

私の先生との出会いの中で最も強い思い出となっていますのは、アブラナ科やネギ属野菜の特有成分でありインパクトある香りや機能性を持つ「含硫化合物」の化学に引き込まれるきっかけを示していただいたことです。

一方、先生は日本の漬物産業の発展に寄与する課題にも精力的に取り組んで来られました。特に、まだ科学研究の対象とまでには至っていなかったわが国の野菜・果実の漬物を工業的に一定品質の製品として流通し得る食品として作り上げるための製造と品質保持技術の確立に極めて多大なる貢献をなされました。その功績等により、2010年秋の叙勲におきまして瑞宝中綬章を受章されました。その祝賀会には研究室を巣立っていった多くの卒業生が全国から馳せ参じたところです。

前田安彦先生を語る上で欠かせないことの一つに、食品化学研究室を選んだ学生たちへの先生の接し方があります。前田先生の学生たちとの付き合い方は、本当にざっくばらんで、時には自宅まで呼び集めて、まさに師を身近に感じるという濃密なもので、学生にとっては大学の先生とそこまで深く接し得るのかというほどでした。研究室に在籍した学生に対する先生のこのような接し方が、いつまでも全国に多くの前田門下生として存在する理由の一つと言えることができます。前田安彦先生、長い間、大変お世話になりました。どうぞ安らかに眠りください。

(昭45化卒 宇田 靖)

追悼

暉峻衆三先生を偲ぶ



2023年12月22日、暉峻衆三先生が99歳で急逝されました。先生は1947年に東大農業経済学科を卒業された後、東大社研、東京教育大学文学部、信州大学経済学部の勤務を経て、1984年に本学農業経済学科の教授として赴任

され、1990年に定年退官されました。学部、大学院修士課程及び発足間もない東京農工大学大学院連合農学研究科では主に「農政学」を担当され、多くの有為な学生・研究者を世に送り出しました。

先生は著書、論文等多数の業績を残しておられますが、中でも代表作『日本農業問題の展開 上・下』（東大出版会）は国内外で高い評価を得ていますし、編著の『日本の農業150年 1850～2000年』は日本語のみならずハングル版、中国語版、英語版も出版され、世界での日本農業研究にも多大なる貢献をされています。また、本学在職中には、先生の編著で『日本資本主義と農業保護政策』（御茶の水書房）を出版なさいました。

理論のみならず実践も重視し、定年後の1992年から2004年まで『農業・農協問題研究所』の理事長を務められ、わが国の農業・食料及び地域社会の発展に貢献されました。99歳まで記憶力は低下することなく、頭脳明晰、人格高潔な先生でした。

去る、4月7日東京で「暉峻衆三先生を偲ぶ会」が行われました。会にご家族・同僚・教え子など数十名が参加し、厳かに執り行われました。先生の人望の厚さを改めて実感致しました。

本学科発展のため、多大なるご尽力をいただいたことに改めて深く感謝を申し上げますとともに、心よりご冥福をお祈り致します。

(昭42経卒 水本 忠武)



## 追悼

## 小金澤正昭先生を偲ぶ



小金澤正昭先生は、2023年10月24日に73歳で逝去されました。先生は、1950年7月16日に東京都渋谷区でお生まれになり、東京農工大学、同大学大学院で林学、環境保護学を学ばれました。

その後平成3年に農工大連合農学

研究科で学位を取得されました。

研究面では昭和54年に野生生物研究センター（現：自然環境研究センター）において、野外調査を主とした大型哺乳類の生態研究を先駆的に展開され、日本に野生動物保護管理を導入し、野生動物の保全・管理に尽力されました。栃木県立博物館を経て平成3年、宇都宮大学農学部附属演習林に講師として着任され、助教授、教授を歴任、平成26年度～平成27年度まで雑草と里山の科学教育研究センター、平成28年度～令和3年度まで雑草管理教育研究センター特任教授、名誉教授として宇都宮大学の研究教育活動に貢献されました。平成16年～平成24年農学部附属演習林長として演習林運営の舵取りをされました。

教育面では森林科学科の教育カリキュラムを主に担当され、学部では「野生鳥獣管理学」、「同実習」、大学院では「野生鳥獣管理学特論」などを教授され、野生鳥獣管理学研究室を主宰して卒業生・修了生から多数の国家公務員・地方公務員の野生鳥獣関連の技術者を輩出されました。

地域貢献では行政職員への啓発・支援を積極的に展開され、平成21年には文部科学省「里山野生鳥獣管理技術者養成プログラム」の実施責任者として、人材養成に注力されました。平成25年には「一般社団法人 鳥獣管理技術協会」を設立、「鳥獣管理士」の認定事業を実施し、人材養成プログラムを継続に尽力され、平成10年～平成20年には野生生物保護学会理事、評議員として学会の発展に貢献されました。

自然保護や野生動物管理については大変なこだわりがあった先生でした。教え子の結婚式の祝辞として、米国の著名な環境化学者レーチェル・カーソン氏の「センス・オブ・ワンダー」の一節を朗読され、科学的問いを持ち続けることの大切さを示されたことが特に印象に残っています。これまで多くの教えをいただいた小金澤正昭先生に、あらためて感謝申し上げますとともに、ご冥福を心からお祈りいたします。

(昭57林卒 大久保達弘)

## 追悼

## 高橋衛先生を偲ぶ



1月6日に高橋衛先生が逝去されました（享年82歳）。謹んでご冥福をお祈りいたします。

高橋さんは昭和36年、農学部農芸化学科に入学され、昭和40年3月卒業後、(現) 会津大学を経て、昭和41年10月母校農芸化

学科助手に採用され、その後、同助教授に昇進した。

農芸化学の教育・研究体制は発足当初から大枠は変わらず、新分野への対応は他大学に比べても著しく遅れていた。既存の「植物栄養学及び肥料学」、「土壌学」、「生物化学」、「農産製造学」、「食品化学」の5講座に加えて、「応用微生物学（五月女教授・高橋助教授）」の新設は悲願であった。

しかし、新設した研究室には分析機器をはじめ、設備が不足していたうえに、予算措置はわずかであった。そのためであろう、研究室が隣り合わせていた私には、高橋さんが道具作りや機械いじりなどをしている姿がよく思い浮かぶ。応用微生物学を希望する卒論生が多いなか、体調がすぐれなかった教授を支え、農芸化学科の主要研究室であり続けた。

平成4年、高橋さんは26年在籍した母校を辞し、(株)みずすコーポレーションに移った。同社の社長と卒業生（小杉敏行さん）のご厚意によるものであった。私はこの時点まで高橋さんの本当の苦しみを理解していなかった。友人たり得なかったといってもよい。以下は私の推察である。

この時代、国立大学の教授、助教授は博士号の保持が当然視されるようになり、高橋さんも執筆段階にあったと推察される。しかし、博士論文の主要部分を構成する業績（学術雑誌に既発表の論文）が共同研究者の博士論文に使用されたために、自身の博士論文を構成することができないことを知った。母校を辞したのはこの時期と一致する。

長野での高橋さんは農芸化学を越えた機械・設備に関心を広げ、社の主要製品の製造技術の改良発展に貢献した。また、大学では得難い方々との交友があり、休日には野山を散策し、登山を楽しむ余裕を得たようだ。

(昭40化卒 加藤 秀正)